

お兄ちゃん。パ。パ。

ぼくは、学校から走って家に帰っている。誰もいない事は分かっているのに、玄関であいさつをする。

「ただいま。」

静まり返った玄関からは、ぼくの声だけがこだまする。何だか心ぞうの脈が速くなってきた、ぼくのと鼻から涙と鼻水が止まらない。

「早く帰ってきてよ。さみしいんだよ。」

ぼくは誰にも言えない言葉をささやいていた。

ぼくのかあさんは、ぼくが赤ちゃんの頃から働いていて、小さい時は、じいちゃんとはあちゃんがスーパーマンのように送り迎えをしてくれていた。でもそれは、長くは続かなかつた。じいちゃんがぼくの目の前で倒れてしまったから。そこから、ぼくの生活はいつか変わってしまった。

ぼくの父さんは、仕事人間だと母さんがよく言っている。ぼくにとっては、やさしくて面白い関西人。ぼくが小さいころ、仕事で二年も離れ離れになっていた。つい最近も一年同じように離れていた。じいちゃんが倒れたのはその時期だった。ぼくは急に独りぼっちになった気がした。そんな時、ぼくの横にはたっくんがいてくれた。

たっくんは、ぼくの六歳上のお兄ちゃん。ぼくは、たっくんが何で横に来てくれたのか分からなかった。その時、たっくんが、ぼくにこう言った。

「ぼくが、父さんとじいちゃんの代わりになるから大丈夫だよ。」

ぼくの頭の中は真っ白だった。どういう事なのか、うでを組んで考えてみた。でも分からない。そんな時、たっくんがこう言った。

「ぼくも小さい時、真くんと同じでさみしかった。ぼくは、母さんがいつもぎゅってしてくれた。真くんは、ぼくがぎゅってしてあげるから。」

たっくんが、ぼくにぎゅって？うそでしょと思った。それから、たっくんは毎日、ぼくに学校での出来事を聞いてくるようになった。それだけじゃない、宿題を教えてくれたり、時にはお風呂も一緒に入ったり、母さんが遅い時には、ごはんも作ってくれた。そして、さみしい時には、ぎゅってしてくれた。たっくんが本当に、父さんになったようだった。

ある日、ぼくが学校から帰ると、たっくんが家の中で倒れていた。ぼくは、おどろいて声が出なかった。

「たっくん、しっかりして！」

やっと出た言葉だった。たっくんは、突発性の病気だった。ぼくの周りの大切な人達が病気になってしまった。ぼくに何ができるのか、真剣に考えてみた。たっくんがぼくをぎゅってしてくれた時、ぼくはうれしくて涙がでそうだった。今度はたっくんに、ぼくがぎゅってしてあげよう。きつと飛び上がるだろうな。

ぼくが、笑顔になる事で、お兄ちゃんパパが元気になるのなら、ぼくは頑張れるよ。だって、たっくんの笑った顔が見たいから。ぼくの大好きなお兄ちゃんパパ、ありがとう。